

知的障害児の運動探求

保健体育 佐分利 育 代

Studying Movement of Mentally Retarded Child

Ikuyo SABURI

1. はじめに

障害児教育が「内在化」に偏り「できる」ことだけを追ってしまいがちな傾向⁽¹⁾に対して、発達の主体を子ども自身に返し、「ヨコの発達」をも発達としてとらえる⁽²⁾考えは、幅の広い学習指導の可能性を示唆する。

先回の「知的障害児のダンス学習」⁽³⁾では、T養護学校の中学部全員（男子5人、女子7人）を対象に、一人一人の生徒の活動を引き出すことを目標としたダンス学習指導を行った結果、手がかりとした運動課題への挑戦以外にも、生徒の自発的、創造的な運動探求が見られたことを報告した。能力別に決められた課題だけを練習するのではない学習では、クラスのどの生徒も自分の力を発揮しながら友だちとかかわり合い、再び自分の力を確認し発見していた。このダンス学習での方法、すなわち、「運動課題は学習の手がかりとし、達成目標としない。能力混合のクラスで同じ手がかりを体験することから始める」は、ダンス以外の運動学習でも広がりのある学習の場を提供できるのではないかと考えられる。

今回、先回の報告での中学部一年生（男子3人、女子2人）の三年生時のマット運動学習でも、手がかりとした運動課題である前方回転を中心に、様々な運動への取り組みが見られたので報告したい。

2. 学習の概要

学習は、岩田の鳥取大学教育学部卒業研究⁽⁵⁾として、1993年度T養護学校三年生のH子の前転習得への練習課題をクラス全員の学習目標「いろいろな回転をしよう」の手がかりとして6回行ったものである。

H子は、脳性麻痺の後遺症と過緊張によって本人の意欲に比べ、痙性歩行、運動の協調性に欠けるなどの所見を得、動きがぎこちないとされている生徒である。H子は「からだづくり」をねらいとした養護訓練でのサーキットトレーニングに組み込まれた前方回転（以下前転とする）の前半部

分、すなわち両手で支持して頭を中に入れ、足で床を蹴って、背中を丸くして前に転がる部分が5人のクラスメートのうちただひとりできないで、マットの前で止まってしまっていた。

H子の他の学習者4人のうち、前転の後半部分で床に手を付かず起きあがりまでをスムーズにできるのはA子（ダウン症候群）のみで、男子3人、S男（ダウン症候群）、T男（てんかん）、U男（プラダー・ヴィリー症候群、肥満）はいずれも起きあがりの後半部分は完成しているとは言えないが、前に転がれるということで「できる」として自他ともに評価している。

精神発達と運動発達との関わりで前転の運動発達を評価している近藤⁽⁴⁾によれば、H子の前転は2～3歳、A子以外の前転は4～5歳の発達段階である。生活習慣、社会性など他の発達の評価と近藤による表を比較すると、どの生徒も手を着かずに起き、一連の動作として行える段階の潜在能力はあると思われる。適切な手がかりによって「できる」段階を固定させず、次の段階、あるはさらに幅広い技の経験に向けて探求を深められるはずである。

指導者は岩田、T養護学校の教諭2人が指導補助としてついて下さった。佐分利は指導補助として第1～3時の学習に参加した。

学習の手がかりと学習経過は以下のようである。

第1時 10月25日 いろいろな「回る」を手がかりにマットの上でも回ってみよう

第2時 10月30日 前転を手がかりにマットの上でいろいろな回ってみよう

第3時 11月 2日 坂道前転を手がかりに坂道マットでいろいろな回ろう

第4時 11月 9日 動物歩きを手がかりにマットの上でいろいろな回ってみよう

第5時 11月18日 いろいろな場所での前転を手がかりにいろいろな回ってみよう

第6時 12月22日 いろいろな場所での前転を手がかりに好きな場所で好きな回り方をしよう

第1、2、3及び6時はクラス全員での学習ができたが、第4時での学習の手がかりがあまりにもH子の腕支持と、蹴りの練習を意識したものであったため、学習が進む中でH子とそれ以外の生徒の能力別グループ学習になってしまった。また、第5時でも準備運動でのつまづきが原因で、H子のみ個人練習になってしまった。第6時ではH子も他の生徒と一緒に様々な場での回転運動を体験した後、自分の好きな場所（遠くへジャンプして前転するように目標となる線を引いてあるマット）を選んで練習した後、坂道での前転では何度試みても成功した。

第1時から3時では一つの運動課題を手がかりに、友だちと交流しながら多くの運動が試みられる学習活動が展開された。本報告では、佐分利が参加した学習の最後にあたる第3時の学習を取り上げ、観察者が移動しながらH子を中心にクラス全体を撮ったビデオを手がかりに、生徒の運動探求を分析、知的障害児のマット運動学習における自発的な探求の可能性とその意味を考察する。

3. 第3時における坂道前転を手がかりにした学習での各生徒の運動探求

表1. 第3時の学習の流れ

学習目標	マットの上で回ってみよう
学習経過	ウォーミングアップ みんなでいろいろな回り方をする 一人で身体のいろいろなところを回す 一人でいろいろな回り方で回る マットで回る 前転をする 坂道で前転をする いろいろな回り方で回る

表 1 は第 3 時の学習の流れである。図 1 から 5 は、第 3 時の学習のうち展開部分の各生徒の学習を時間経過に沿って取り出したものである。指導者が提案した運動課題は《》で、指導補助者が各生徒の運動学習の手がかりとして提案した運動は〈〉で示した。また、生徒が友だちを真似たり、友だちとの関わりの中で一緒に試した運動を〔〕で、自ら考え取り組んだ運動を『』で示した。() と ○ で囲んだ数字はその運動の試技数で、○ で囲んだ数字は自ら挑戦した試技数を表す。

(1) S 男の運動探求

時間経過	10	20	30	40分
○ 指導者が提案した技・課題 〈〉指導補助者が提案した技 〔〕友だちから得た技 『』自ら考えた技 (1)・・・課題練習 ①②・・・自発練習	<p>○(前転) (1) ○(坂道前転)</p> <p>友だちの練習を見ている 〔坂になったマット上にねころぶ〕①</p>	<p>失敗 ①②</p> <p>成功</p> <p>〈坂の上からの横転〉(1)② ③ 〈坂の下から上りの横転〉①② ③ ④ 指導補助者へ試技を勧める① ② 〈手と膝をついた姿勢での横転〉(1)</p>	<p>H子の前転練習をのぞき込む 「ころりっていけ」</p> <p>〈H子の前転への補助〉(1)②③ 『H子の前転への考案した補助』 ①②③ ④ ⑤ T男・指導補助者へ 「マットを高くする」① 〔腕側挙前転のまね〕①</p>	

図 1. S 男の運動探求

S 男 (ダウン症候群) は、マットでの回転の手がかりとして指導者が提示した、平坦なマットでの前転を 1 度行ったがその後、本時の学習の手がかりとしての運動課題「坂道での前転」が提示され、他の生徒が試技してもその様子を見ているだけで試みようとはしなかった。その理由の一つとして担任は、「視力が弱いため、高所の恐怖が強く、段差に弱い」ことをあげている。また、「友だちの動きを見てから行動を起こす」傾向にあるとの所見もある。

a. 連続横回りでの坂道登り降り

S 男が再びマット上に上がったのは約 12 分後で、U 男がマットの上に寝ころんだのを真似て自分もマットの上に寝ころんだ。そして、この転がりを手がかりに指導補助である佐分利 (指導補助者 S) が提案した坂道での横転を S 男は受け入れ、最初の 1 度だけ補助を受け坂の上から下へ転がった。上から下への横転に続き、S 男はそのまま坂の下から上へ転がり登った。指導補助者 S が「すごいすごい」と誉めると、再び横転で坂を下り、そして登った。

横転による坂の下りと登り、すなわち運動を反対側に繰り返して行う発想は、第 2 時の学習で S 男が T 男や指導者に命じて『前転と後転を繰り返す (写真 1)』、『筒になった補助マット上に T 男を腹這いにならせ、H 子や A 子を指導してマットを一緒に転がし、反対にも転がす (写真 2)』、『補助マットを越えて前転、後転で補助マットを再び越える (写真 3)』など盛んに試していたものである。そして「S 君考えたの (H 子)」「S 君やって、教えてよ (U 男)」「注文が難しいね (指導補助者)」など認められ賞賛を得ていた。第 2 時での S 男は自分が運動そのものを試技するというよりも、自分の発想を次々と指導者や、友だちに指示して試技させ、また補助も手伝わせていた。それを今回は横転での反対方向への繰り返しという自分の運動探求の中で試したのものとして興味深い。

傾斜を横転で転がり登ることをこの時も指導補助者 S に勧めている。転がり登るのが下手な指導補助者 S の試技の後で、S 男はもう 1 度横転での下りと登りを繰り返した。

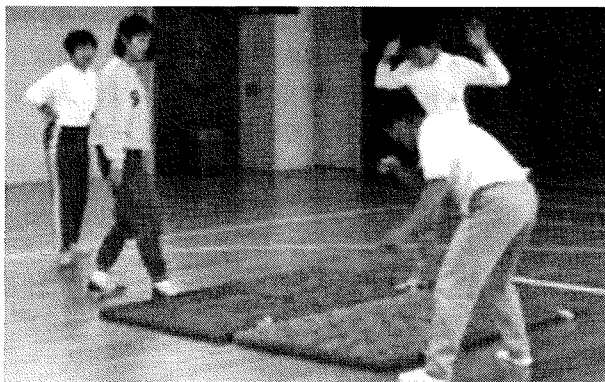


写真1. 前転と後転の繰り返しをT男に指示する



写真2. 補助マット上での腹這いをT男に指示する

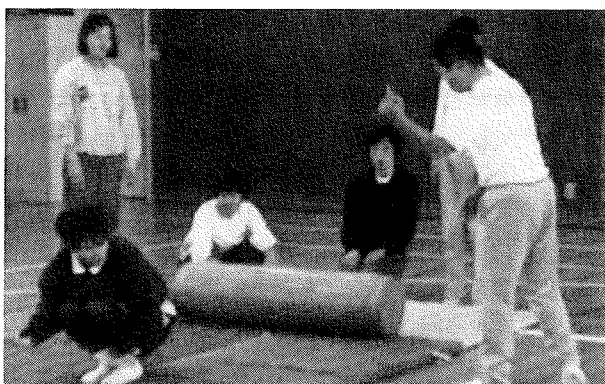


写真3. 補助マットを越えての前後転の繰り返しを指導者に指示する

高さへの感覚になれることへの手がかりとして手と膝で支持した姿勢で横転で坂を下りることの指導補助者Sの提案に応じたが、すぐに手足を伸ばした横転で登って返った。

b. 腕側挙前転補助

左腕の支持力の弱さもあって頭を入れられないH子に対して指導補助者Sが腕側挙での前転を提案した。行き詰まっていた前転からの気分転換の意味もあった。指導補助者Sが見本を示し、その際にH子とS男に指導補助者Sの手を持って補助してくれるように依頼した。指導補助者の見本は2回行った。

1回目の指導補助者Sへの補助では、前転の勢いに振られてH子は手を離してしまっていたが、S男はやはり振られてはいたが手を離さなかった。そして2回目の補助では、今度も手を離したH子に対して、S男は前転の動きについて手を前に運んでいた。補助の意味を理解し、試技者のタイミングに合わせて動くこともできたと評価できる。

H子が腕側挙での前転に挑戦した、S男にとって3度目の補助では、さらに、回転の方向に手を引っ張り、H子を回そうとする様子が見られた。

H子が頭を入れられないので指導補助者Sがもう1度見本を行った。S男の4回目の補助は、回転に合わせて自分も移動しながら手を引っ張るという力強いものであった。

続いてマットに上がったH子に対しては、手を握っていつでも引っ張ることのできる体制で待った。しかしH子は、頭を入れられず、腕側挙での前転の試みは失敗に終わった。

c. 坂道での前転

坂道での横転の後、指導補助者SよりH子の坂道での腕側挙前転への補助を依頼され応じたが、後はH子と指導補助者Sが頭をどう入れるか話している間、H子の横に座っていた。しばらくして、マットのはしに手をやってから立ち上がり、自ら坂道での前転を試みた。

S男の坂道前転の自発的な試技は、1度目は頭を入れられなくて前に転がれなかったが、続いての試技では成功した。S男が坂道前転にそれまで挑戦しなかった理由が視力の弱さによるものであるとするなら、横転運動によってからだで坂の高さ経験することで高さへの恐怖という課題を解決できたととらえられる。S男のこの試技は、坂道での前転が学習の手がかりとして示されてから約20分後であった。

d. マットを引き上げる補助の発見

① H子への補助

坂道前転に成功したS男はH子が指導者と指導補助者の補助を受けて坂道での前転を練習しているのをのぞき込むようにマットの横に座って見ていた。そしてH子が腰を高くできず頭を手の中に入れられないのを見ながら、マットの横に付いている持ち手を引き上げる動作を繰り返した。次に、突然立ち上がってH子の後に行き、その足下のマットを両手で持った。

H子の補助に付いていた指導者と指導補助者Sがそのアイデアを認め、H子も「S君、頭いい」と納得して、S男の考案による補助でのH子の試技が行われることになった。

S男は、H子が足を蹴るタイミングに合わせてマットを引き上げ、そのけりを大きくすることでH子の腰を高く上げ、頭を入れやすくするという補助を考案した。H子の腕は指導者と指導補助者が補助し、このS男考案の補助でH子は左に傾きながらではあるが前に転がることのできた(写真4)。

S男のこの補助の探求を追ってみると、実はマットの持ち手を引き上げて考える以前にS男が補助の探求を始めていたのではないかと解釈できる行動があった。それはまず、補助を行うすぐ前の



写真4 S男のH子への補助



写真5-1 S男のT男への補助

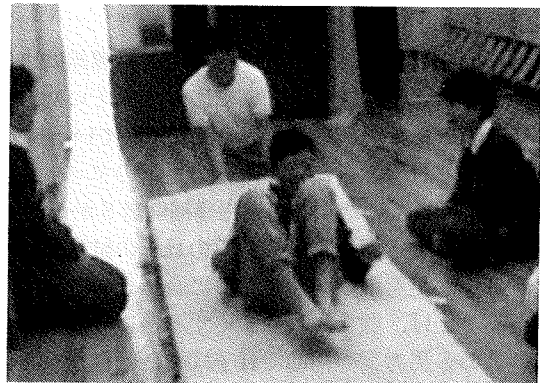


写真5-2 S男のT男への補助

坂道前転の自発的な試行と思われた行動である。とらえ方によっては1度目の失敗がH子のできない状態の模擬試行で、2度目に行った成功例でH子の前転に足りないところ(すなわち足のけり)を確かめたと考えられる。同じように、S男自身の坂道前転に立つ前にマットの端を引っ張ったこと、指導補助者とH子が話す傍らに座っている時の様子、さらにその前の指導補助者に依頼されてH子の補助を前に転がれるように手伝った時まで、補助への課題解決の過程としてさかのぼることができた。もしそう考えることができるとすれば、S男は課題を順序を追って思考し解決する力を持っていると言える。少なくとも、H子の前転に欠けている力を発見し、その克服法を見つけ、別の道具で予備実験して試してから、本番で試して成功するという力を持っていることを見せてくれた。しかも、H子の運動のタイミングに合わせて自分の運動を行うという正確さと、H子に必要な強さでH子のけりを補助している。

腕側挙前転、今回の補助とも、S男が運動を理解し、必要な力を予測して補助する意味も理解して、それを実際に行う力を持っていると言える。

② T男への補助

H子へのこの補助を見ていたT男に依頼されて、T男にも補助し、良いタイミングでスピード感のある前転を体験させた(写真5-1, 5-2)。また前転の後、T男の横回りに対しても同じ要領で2度補助し、T男の連続横転の探求を助けている。

③ 指導補助者への補助

指導補助者も依頼しS男の補助を受けた。S男のマットを引き上げるタイミングは誰を対象としても、前転の動きを妨げないものであった。S男は見つけた技術を繰り返し試すことで着実に自分のものとして獲得していったものと思われる。

T男と指導補助者への補助の直後もA子が違う回り方に挑戦したいから補助はしないでくれと断ったときも密かにマットを引き上げる真似をして笑うという行動を見せたり、5分ほど後でH子が前転練習をしようとしている時にも再びこの補助で助けようとした。そして指導補助者である担任に補助を止められた後、「ころりんてゆけ」と声をかけて応援した。

(1) T男の運動探求

T男にはてんかんの所見があり、小発作に見舞われたときに動きが止まり急激な落ち込みと見ることがあるとのことだが、運動学習ではエネルギーで、興味を持っていろいろなことに挑戦する。しかも繊細で柔軟な動きや気配りも見せる。

時間経過	10	20	30	40分
○ 指導者が提案した技・課題 <> 指導補助者が提案した技 [] 友だちから得た技 [] 自ら考えた技 (1)・・・課題練習 ①②・・・自発練習	<前転>(1) [H子の補助] (1) (坂道前転) (1) 「坂になったマット上で弾んでから前転」①(2)成功	②↓ <左手を着かないで起きて> ↓ 「後転」① [S男の考案した補助で坂道前転] ① [S男の考案した補助で2回連続坂道横転] ①②←「3回に挑戦」 「マットの坂を高くする」① 「止まるだけ一よ」 <登坂前転>「2回連続」① <左手!> ↓ 「ダイミクシな開脚前転連続」① ↓ <腕側挙片足前転>(1)(2)③④ 勢いをつけて↑ 「頭くるっと回ったぞ」と評価→「片足踏切前転」①	「ダイミクシな開脚前転」 ↓ ③ ④ 「後転」①	

図2. T男の運動探求

一年生時のダンス学習でのT男は、並べた傘を大きな連続ジャンプで跳び越し、傘と傘の間隔を測る几帳面さを見せ⁽⁶⁾、即興のダンスではゆっくりとした音楽に呼吸を合わせながら手を広げ浸りきって踊る様子が印象的であった。今回のマット運動でもやはりT男のダイナミックな運動探求が見られた。

a. 前転補助

H子が前転を始めるとすぐにH子にかけより、U男を真似てH子の手を押さえる補助をかって出た。この補助は、第2時でU男が指導者とともに行ってた補助の仕方では、その時H子が前転に成功している。補助を通して、腕の支え、頭を入れること、お尻を高くすること、足を蹴ることをH子に伝えるU男と共にそれらを言葉として繰り返しながら、H子の試技を共有し内的体験を重ねている様子が見られた。

b. 前転

H子への補助の直後に行った最初の前転は、これまでの単発の前転に比べ上体の返しが速く、からだ全体のまとまり感があるものになっていた。

T男は第2時の最後に発表した「各人の最高の技」では、自らマットの枚数を増やして長くし、誰よりも多い回数、7回の連続前転を行ってふらふらになった。速い上体の返しは連続前転の中で獲得したと考えられる。また、H子の補助を通してのイメージトレーニングが最初の前転への準備になっていたとも考えられる。

c. 坂道での前転

T男はH子の前転学習のために提案された坂道での前転では、誰よりも早く行った。そして次々と友だちの学習とかかわり合いながら自らのダイナミックさという良さを伸ばしている。

d. H子への補助

U男とともにH子の試技を補助して、平坦なマットでの補助を深めている。この坂道でのH子の前転試技にはクラス全体が集まり補助したりのぞき込んだりしている。

e. 両足跳びからの前転

H子への補助に続いて、坂の頂上で両足ではずんでから行うというダイナミックな坂道前転を行った。回転前半の勢いに対して後半は身体が開き、左手で支えて起きあがるものになった。

指導補助者Sの「左手を着かないで起きて」の指摘により再び挑戦、上体をスピードに合わせて起こし左手を着かずに両足で立ち上がるどころまでできた。「左手を着かない」ことの意識は上体を引き起こす力になったと見られ、T男にわかる手がかりだったといえる。

T男は先々回(第1時)の前転では片手を着いて起きていた。前転後半の技術が獲得できたと言える。

また、飛び込み前転系の両足跳びをしてからの前転への挑戦は前時(第2時)に始まっている。円筒のマットを飛び越して前転をしようとして、頭を入れられずに顔から落ちている。円筒のマットを置いたのはT男で、それを超えての前転の発案もT男である。この発案はすぐにS男に取り入れられ、S男が指導者に指示してさせた円筒マットを越えながらの前転と後転の連続に発展した。このS男に指示されての指導者の試技を見た後T男は再び円筒マット越えの前転に挑戦し、それを成功させている。最初の前転から2分後であった。T男の発見がS男のアイデアを引きだし、S男のアイデアによる指導者の試技がT男の運動へのヒントを与えたといえる。

f. S男の補助による坂道での前転と横転

T男は好奇心旺盛である。S男がH子のために考案した、足下のマットを引き上げる補助を自ら

S男に依頼してその補助での前転に挑戦した(写真5-1, 5-2)。

タイミングいいS男の補助でスピード感のある前転ができたT男は「軽いよ。軽いよ」とその感想を口にし、S男の補助の効果を友だちに知らせた。

さらに、S男の補助によるスピード感を活かしての連続横転を考え、S男に補助を頼んで2度挑戦している。その1度目は2回連続の横転、2度目は「3回連続」と目標を口にして4回続けて転がった。2度目の試技では2回転したところで位置がずれてきたが、それをよい位置に戻して3回4回と転がった。

T男が補助を依頼したことでS男の補助が評価され、技能として定着した。そしてT男の運動探求にもつながっている。

g. 坂を高くする

S男の補助のアイデアをヒントにしたのかT男は、一番上にしいてあるマットを半分に折り坂の頂上に引き上げる。「考えるんだよ」のT男の言葉に指導補助者が「もっと高くするの」と聞くと「うん」と答える。指導者が手伝い下にマットを入れ、高い坂を作る。さらに指導者がマットをなおしたが、そのことでT男の次の行動が止められたようになった。指導者が学習者の行動の何を理解し、何を手伝うか問題である。学習者の考えている目標がよく見えないままに今の行動にのみ手を貸すことが学習者の行動を止めてしまうこともあるのではないかと思われる。

h. 跳んで前転から開脚前転へ

坂の頂上で片足跳びと両足跳びを行った後、「こうやったらこう、頭からこう」といい、前転を行った。前転からすぐに後ろへ倒れ、ゆりかご運動のように反動を使って両脚を高く上げて戻った。

腕側拳片足前転に挑戦しているA子の試技の後、真似するように両手を広げてマットにつき、開脚で手の支持なしに起きあがると、続けて2回目の開脚前転を行った。ダイナミックな2回連続開脚前転だった。

i. 登坂前転

指導者の提案による、坂道を上っていく前転に対するA子の挑戦の見て、T男も試みたいとの意志を見せ、マットの坂の下にスタンバイするがなかなか順番が回ってこない。「U男君どけて」と言うがU男に先を越され、足を踏みならしてA子に「どけて」と主張するが腕側拳前転の練習に必死のA子にもまた先を越される。それでもA子の試技に合わせて「ごろんごろん」声をかけて待ち、ようやく順番を獲得する。S男と協力してずれたマットを直した後、「こっちから行くぞ。危ないぞ」と両手を広げてみんなにアピールし、坂の下からの前転に挑戦した。

スムーズに起きあがることはできないが力を込めて体を起こし、2回目の前回りに入る。2回目の着地は坂を上りきって頂上を越して床の上だったが、しっかりと起きあがった。

j. ダイナミックな連続開脚前転

腕側拳前転に挑戦していたU男が「できた」と指導補助者に報告し、A子が拍手して「できたできた」と認めているのを見てT男は、「俺のはすごいんだぞ」と主張し、U男をどかせてダイナミックに腕を回しながら連続の開脚前転を見せた。

k. 腕側拳片足前転

ダイナミックな開脚前転を見せたT男に、指導補助者Sが腕側拳前転を提案する。勢いをつけ、腕を前に伸ばして起きることを指導補助者Sはつけ加えた。1回目の試技はまとまった前半に比べ、後半で左手を着いて起きようとした。

「左手」と指摘し、指導補助者SがT男を真似てみせると、2回目は指導補助者Sが足を前後に

開き勢いをつけているのを真似して試技した。しかしお尻がマットから上がらない。

「止まるだけーよ」「見てよおかしい」と言い、もう一度勢いをつけて回る。S男がマットを引き上げて少し上げてくれるがうまく上体を起こせず、「こうやって」と止まってしまうことを訴えた。この訴えに対しては指導者も指導補助者も助言をしていない。

1. 片足で踏み切つての前転

指導補助者Sが異なる前転の連続をA子に提案していると、T男は「手なしでか、手ありでか」と聞き意欲を見せる。そしてA子の試技の後、「俺の見とれこれだぞ。いいか行くぞ」と片足で踏み切つて大きく前転した。お尻はついていたが「頭くるっと回ったぞ」と回転後半の感覚を自己評価した。

(3) A子の運動探求

A子（ダウン症候群）は負けず嫌いで何事にも一生懸命取り組もうとする意欲があるとの担任の所見通り、前年のダンス学習でも熱心に新しい運動に取り組んでいた。自由なダンスでもリズムカルに楽しそうに踊るが、真似されるとやめてしまうところもあり、友だちと動きを真似し合つて楽しむことや、友だちと一緒に見つけることはあまりなかった。運動能力が高く、友だちの真似よりも指導者の運動に挑戦することや、自分で見つけた課題に挑戦することが多い。

前転は両手を前に出して起き上がることができる。第1時では膝は離れているが両足をそろえて起き上がり、2回連続の前転を行った。第2時では脚もそろえて、4回の連続前転もスピード感を持って正確に力強く行った。手で支えることはできないが手を使わずに後転も行った。H子の前転学習の手がかりをA子の興味あるものとしていかに提示し、運動探求の意欲を持たせ続けるかが問題の一つである。

時間経過	10	20	30	40分
(O) 指導者が提案した技・課題 <> 指導補助者が提案した技 [] 友だちから得た技 [] 自ら考えた技 (1)・・・課題練習 ①②・・・自発練習	<前転> (1) (坂道前転)	「連続」① (坂での開脚前転) (1) <連続開脚前転> (1) <腕側拳前転> (1)②③	「回転途中で開脚」 ↓ ②③ 「連続」④ <腕側拳片足前転> (1)② [横転・坂道往復] ①	(1)での失敗を受け 指導補助者は評価したが満足できない 踏切足を変更して 頭を入れる練習 ↓ 「連続」③ ④⑤⑥⑦ 自己評価 「ちょっとできた！」 「これできたで」指導補助者へ <登坂前転> (1)② <異種前転連続> (1)
	H子の応援			

図3. A子の運動探求

a. 坂道での連続前転

H子の前転探求に対してA子はそばに座ったり、のぞき込んだり、「がんばれ」と声かけしたりはするが、S男やT男、U男のように直接手を出して補助に回ったりはしない。自分の技術に対しては意欲旺盛であり、みんなのやることくらいはできるという自信もある。

坂道での前転が指導者から提示されて、T男やU男が興味を持って取り組んでもすぐには取り組まなかったが、T男が坂の上で跳んでから回るといふ勢いのある前転を見せ、指導補助者から指摘されて、手を着かないで起き上がる練習をした直後、自分も勢いをつけて坂の上から前転し、膝が

伸びきるくらいに立ち上がるとそのまま続けて2回目を回った。T男の課題であった、手を着かないで起きることはもちろん達成しさらに、ジャンプでつけた回転の勢いを坂道の傾斜によって増し、その勢いを両脚でしっかり受けとめ、平坦なマットでは得られない起きあがりの力に変えていた。

T男が見つけた課題、T男が注意された課題を自分のものにして取り組み、達成感を得た運動探求ととらえられる。

b. 坂道での開脚前転

指導者が開脚前転を提案し師範してみせるとA子はすぐに挑戦し成功している。指導補助者Kが開脚前転での2回連続を見せると、これに誰よりも速く挑戦したのがA子で、回転後半で少し足を寄せながらではあるが成功している。

c. 坂道での腕側拳前転

勢いのある前転、開脚前転の成功より、指導補助者Sが手で支持しない、腕側拳前転を提案し、2度師範した。U男が挑戦しようとしたがためらい、「Aちゃんやってよ」とマットを降りた。それに答え挑戦し、起きあがりは両足でであるが、成功した。A子の成功を受けてU男も挑戦した。

A子はこの後1分後と、1分50秒後にも腕側拳前転に自主的に挑戦している。特に3度目の挑戦では、マット上のS男を退かせての試技で、両足での起きあがりではあるが成功した。A子の成功を受けてU男も挑戦した。

さらに、開脚前転と横転の練習をはさんで約5分後には、腕側拳前転を2回続けて回る連続技に自ら挑戦、成功し、指導補助者や友だちから「うまい」との評価を受けている。そしてその3分後にも2回連続の腕側拳前転を行っている。

d. A子流の開脚前転

A子がb.で行った回転後半で足を少し寄せた開脚前転が、脚をそろえた伸膝で手を着き頭を入れて、回転途中で開脚し、脚を閉じて起きるという明確な運動として出現した。

回転し終わったA子は「エヘヘン」と指導者に向かって笑った。このA子流の開脚前転を、A子は先に開脚前転を提示してくれた指導者に見せたかった。しかし指導者は、指導補助者Kに指導されて壁倒立をしているH子を見ていてA子を見ていなかった。A子は「これもできたしなあ、足こうしても」と指導者に訴え、注意を引くようにした。「すごいな。もう1度やってみて」という指導者の言葉に、再びA子流の開脚前転を行った。

e. 腕側拳片足前転への自己練習

A子のc.での連続の腕側拳前転のスムーズな試技に対して、指導補助者Sは足を前後にして頭を入れる、片足での腕側拳前転を提案した。これに対してA子は「あ、そうか」と答え試技しようとしたが、S男、T男、指導者がマットを直そうとしていたためすぐにはできなかった。しばらく待っているが指導者がマットを丁寧になおしているため待ちきれず、「S先生に教えてもらったのやりたい」と主張し試技した。

まず、足を前後にする際に左足を前にして回ったが右側に傾いて転がった。この結果をA子は、指導者らがなおして高くしていたマットの坂のせいだと主張するかのようにマットの高さを「減らして」と言った。

しかし、そう言いながらもマットの横の床の上で、今度は右足を前にして、頭を入れる練習を行っていた。左足を前にしたせいでバランスがとれなかったとの自らのフィードバックによる練習のようであった。

マット上での次の試技は、右足を前にして行い、傾かずに成功してそのまま手で支持しての前転

を続けて行った。「やったあ」との自己評価を行った。

指導者が提案した、坂の下からの登坂前転に2度挑戦した後、もう一度片足での腕側拳前転の連続に挑戦、今度は、起き上がるときも片足ずつで2回目の前転も手を使わずに行った。S男は、このA子の試技に合わせて、「ごろん、ごろん」と声をかけた。

指導補助者Sは「うまいうまい」と評価した後、起きあがりの時に片足を着かないで起きる腕側拳片足前転をさらに提案し、2度試技した。これに対しU男も興味を示し、挑戦した。A子は、左足を前にして、右脚を伸ばしたままで前転し膝を曲げた左足と伸ばした右足で起き上がろうとするが右足がつかえて勢いが止まり難しい。「エヘヘ」と失敗を笑いながらも手を叩き、楽しそうである。だが、指導補助者Sが「いい」と評価すると不満そうに壁によりかかった。

S男やU男、H子の挑戦の間、隣のマットで練習し、「ちょっとできた」とみんなのところへ戻って、試技の準備をし「これできたで」と指導補助者Sを見た。そしてその言葉通り、片足を伸ばしたままで起き上がり、そのまま続けて2回目の前転を行い起き上がる際には伸ばした片脚が上がっていた。A子の片足での腕側拳前転連続は完成した。指導補助者Sの「そうそう」の言葉を今度は満足そうに受けた。

U男がA子の成功に刺激されて腕側拳前転に挑戦し、U男のそれまでの試技の中で最もうまく行き「できた」と得意顔で指導補助者Sに告げているのを見て、A子は「できたできた」と、片足跳びをしながら体を反らし手を叩いて喜んだ。それまではあまり友だちのことに関心を示さないA子だったが、自分の技の完成で友だちの成功も喜べる余裕ができたと思われる。

片足での腕側拳前転の一連の練習においてA子は、運動を要素に分け、足での支持を確保するという課題を持っての練習や、他が評価しても自分で評価できないことは解決まで追求するなどの運動探求を見せた。

f. 横転での坂道往復

S男が、自ら考え出した横転での坂の下りと登りの試技を、指導補助者Sに指示して行わせているのを見たA子は、自分も真似して横転での坂道往復を行った。

g. 異種前転連続

この時間にてきた、前転、開脚前転、腕側拳片足前転を連続する指導補助者Sの提案に挑戦するが、課題に対する理解ができなかったようで、それぞれ区別の付かない前転になった。

(4) U男の運動探求

時間経過	10	20	30	40分
(○) 指導者が提案した技・課題 (<>) 指導補助者が提案した技 [] 友だちから得た技 [!] 自ら考えた技 (1)・・・課題練習 (1)②・・・自発練習	<前転> (1) [H子の補助] ① <坂道前転> (1)②	②↓ <坂での開脚前転> (1) <連続開脚前転> (1)② <腕側拳前転> (1)	「S君手なくてもできる? やって見て」 肘、手首を内に入れて ② ③ ④ ←「できた」	「痛かったよ。首が寝ていうよ」 マットに寝ころぶ 腕を広げて「手無しでやったよ」
				<背中から跳んでマット上に転がる> (1)

図4. U男の運動探求

プラダー・ヴィリー症候群。ローレル指数274（中1時）という肥満であるが、運動は好きで、ダンス学習でも楽しんで取り組んでいる。運動の持続により疲れを感じたら、自ら床に寝て調節し、再び運動の中にはいることもできる。ダンス学習では、自由に踊る内容で、床に寝ていたが、「寝てもできるねえ」の指導者の言葉に、仰向いて寝たまま腕や脚を動かして踊り、やがて起き上がってランニングからジャンプというダイナミックなダンスを見せた⁽⁷⁾。

また、人の面倒をよく見ることもでき、今回のマット運動でも、H子の補助をかって出るなど友だちを励ますことができる。ただ度が過ぎて、できない子を焦らせたり、非難してしまう結果になることもある。

a. 前転補助

第2時の学習で、指導者とともにH子を補助して前転を成功させている（写真6）。その経験から、H子が前転をしようとしてマットの前に来るとすぐにその支持手を押さえた補助に着く。T男が真似をしてもう一方の手を押さえると、H子に対して、「頭を入れて、お尻高く、ける」と声をかける。腕を補助し、「頭を入れて、お尻を高く」する事は、腕の支持力が弱く、過緊張のためか、頭の後ろをマットにつけることのできないH子に対して指導者が言ってきた言葉である。また、第2時でH子が前転に成功したとき「足をけたの」と成功の時のフィードバックを行っていたのを覚えていての「ける」という言葉かけであったと思われる。

前時での補助を繰り返して行えたこと、T男に補助を教えることができたこと、H子に適切な言葉かけ、特に前回の成功時にH子自身が体感した「ける」ことを助言できているなど、技能として補助が身に付いたものと評価できる。



写真6. U男と指導者の補助により成功したH子の前転（第2時）

b. 坂道での前転

指導者がマットの一方を高くして坂道を作りそれを利用した前転を提案したとき、T男に続いてすぐに挑戦した。そして、「面白い」と言うので再度挑戦した。

c. 坂道での前転の補助

2度の試技で、坂道での前転のおもしろさを味わい、H子に対して「やれ、やれ」と誘うと、補助に回った。U男が左手を支え、T男が右手を支えた。S男とA子がのぞき込み、クラス全員でH子の前転に挑戦することになった。H子は手への補助にも関わらず、また、坂で腰の位置が高くなっているが頭を入れて前に転がることができない。

指導者が、手の位置を示す手形をマット上に置いたが、H子の腕が崩れて、頭の後ろをマットにつけるまでいかない。ここで一旦H子の坂道での前転は中止される。

d. 坂道での開脚前転

指導者が坂の上からの開脚前転を提案した。手の支えを少なくしてH子の頭を入れやすくしようとのねらいも含まれている。指導者の提案に「やめてよもー」と、最初に反応したのはU男だった。新しく少し難しそうなのに対する反応のようである。A子が挑戦し、成功するとすぐにU男も挑戦したが、体を起こせずにマット上に仰向けに寝てしまった。「あいた」と、どこかが痛かったことを告げた。

指導補助者Kが坂道での開脚前転の連続を見せると、A子の挑戦に続いてU男も挑戦した。先の試技で、上体を起こせなかったが、連続を試みた勢いからか、今回は上体を起こせることができた。自ら、「できた」と評価すると再度連続の開脚前転を行い、この試技でも上体を起こすことができた。そして再び「できた」と評価した。

U男は、最初の開脚前転で上体を起こすことができなかった。この結果を自己の課題として持っていたからこそ、連続の開脚前転の試技で「できた」と評価した。しかもその結果を再度確かめる試技を自ら行っている。連続を試行したときのスピード感を、上体を起こすための技術として意識的に使ったと思われる。

ただU男は前転を上体を起こすまでの技ととらえており、足の裏で立つところまでを回転の中に入れていない。したがって連続での前転も、お尻を着いた姿勢で1回目を終わり、2回目は手を着いてお尻を上げてから改めて行っている。前転前半の転がりができないH子はできないとして目立つが、U男のように後半がうまく行かない子どもはできない子としては目立たず、そのために運動探求に対する手がかりを得られにくいままで過ごしていたのではないかということが一つの指導の課題として上げられる。

e. 坂道での腕側拳前転

指導補助者Sが、腕側拳による前転を2回行って見せた。これに対して再び「やめて。もう」と言いながらも試技しようとしてやめ、「Aちゃんやってよ」とA子に依頼した。

A子が応じて、成功すると、すぐに挑戦した。腕を開き、手の支持なしで前に転がることはできたが体を起こすことはできず、「かたいでしょう。痛かったよ」と言い、首の後ろを押さえながら、「首がポキッていうよ」と訴え、マット上に寝転がった。腕側拳前転への挑戦は一旦ここで終わった。

約12分半後、S男の補助によるH子の前転成功、T男の開脚前転、A子の腕側拳片足前転の練習などが始まると、再びマット上に上がった。T男が坂に下から登っていく前転をしようとして、「U君どけて」と頼むが、坂の頂上から手首を内側に曲げての前転を行う。手の支持なしでの前転の練習かと思われる。

A子が腕側拳片足前転の練習をしているのを見て、「何、いまの。ねえS君できるあれ」と声をかけると、自らマットに上がり腕を広げ、腕側拳前転に挑戦した。頭を入れるとき少し手で支え、その後は両腕を広げて転がることができ、体も起こせた。そして、「手なしでやったよ」と評価し「手なしでもできる。やってみて」とS男を誘った。

最初の試技では、首への衝撃が強く、続けて練習する気にはなれず、マットを離れたが、その試技から13分後、1度の試し練習の後の成功であった。

さらに1分後、A子がその日獲得した新しい運動である片足での腕側拳前転などを指導補助者

Sに「これもできたで」と言いながら見せていると、U男も手を着いてから離し、腕を開いて転がる前転をして見せた。この、4度目の腕側拳前転は、最もなめらかに回ることができ、U男自身も「できた」と得意そうに指導補助者Sの方を見た。A子が、右足で跳びながら拍手をし、体を反らせながら「できた、できた」と評価した。

(5) H子の運動探求

脳性麻痺後遺症があり、筋過緊張とされている。痙性歩行を行い、協調運動がうまく行かず、左側は特に不得意である。意欲的に取り組む姿勢は見られ、楽しかった運動学習の後には「楽しくてしかたないんです」とか「この前の音楽が好きです」と明るく語りかけてくる。傘踊りの練習では大きな声で音楽に合わせて唄いながら踊る。

マット運動の前転が、回転前半で頭を入れられずそのために転がれないクラスでたった一人の生徒であり、今回のマット運動学習のねらいの一つは、いろいろな回り方の中でH子には前転を体験させたいことがあった。このため、他の4人に比べH子にとっては前転が手がかりではなく目標として前面に出てしまった学習を何度も強いられることになった。

第2時で、H子はU男と指導補助者の、手を押さえ身体を支える補助だけで、前に転がることができている(写真6)。「どうやったらできたの」と内省への確かめをしたところ、「足をかけたの」と答えた。確かにこの日は自分でよく足を蹴っていた。この質問への回答によって、H子が体感としてできたときの感覚を自覚して、フィードバックできていることが分かった。この日不在だった担任に次の時間には是非見せたいと楽しみにしていたが、この日得られた感覚が、技能としてH子に定着するように学習の手がかりを準備する必要がある。

時間経過	10	20	30	40分
① 指導者が提案した技・課題 <> 指導補助者が提案した技 [] 友だちから得た技 [] 自ら考えた技 (1)・課題練習 ①②・自発練習	(前転) (1) (2) (坂道前転)	(1) (2) (手形で着手位置を指定されて) <両手を補助されたノ・ノドの前転> (1)(2) <ノ・ノドの前転の補助> (1)(2)(3)	指導補助者Sの補助で [Y男の考えた補助で] (3) ④ 成功「見た？」 ⑤⑥ 「S君頭いい」と納得して	(開脚前転) (1) 指導補助者Kの指導で一人での坂道前転(1) 「何で前はできたんですか」 「前はできたけど今日・・・」 指導補助者K*ノ・ノドを使って 腰が上がれば自然に前に落ちることを説明

図5. H子の運動探求

a. 前 転

前時の成功から、「一人でやる。自信がある」と言って前転に積極的に取り組んだ。担任に、前転ができることを見せたくての取り組みであったが、頭を入れることがどうしてもできない。すぐに、T男とU男が補助に走り寄った。U男に「頭を入れて、お尻高く、ける」と言葉をかけられるが、前に転がることはできない。

b. 坂道での補助付き前転

坂道での前転は、H子の前転学習のために指導者が提案した手がかりである。クラスの仲間全員が手を補助したりのぞきこんだりする中、試技しようとするが、頭を入れるまでに支持腕が崩れ、なかなかできない(写真7)。



写真7. H子の坂道前転とクラスの仲間

この後、描かれた手形が示す着手の位置を手がかりにしての坂道前転、両腕を補助されての手の支持なしの前転、開脚から頭を入れての前転などを指導者や、指導補助者に提案され挑戦するが、どうしても頭を入れることができない

c. S男の補助による坂道前転

突然立ち上がってH子の足下のマットを両手で持ったS男による、マットをけりのタイミングに合わせて引き上げるといふ補助の提案は、「S君、頭いい」とH子も納得しての積極的な試技をもたらした。指導者と指導補助者による両手への補助と、S男によってけりの力を得た前転は初めての試技で成功した。この際H子は、S男が少しだけ引き上げているマットの上に足を起き、その補助を十分に理解している様子であった。そしてこの思考に対して「見た」とまわりの者、とりわけこの日一番に見てもらいたかった担任に確認した。

H子の成功は、クラス全員に認められた。この成功はS男の考案の評価につながり、T男にもS男の補助によりよりダイナミックな前転の機会を与えることとなった。

d. 一人での坂道前転への挑戦

S男の補助による坂道前転の成功に対し、担任（指導補助者K）はそれがH子一人での成功でないことをH子に強調した。H子は、T男がS男の補助で前転を試みたり、A子やU男が腕側拳の前転を練習しているのを待っていたが、その練習が一段落するとマットに上がり、一人の力での前転を試みた。

何度も試みようとするが頭を入れることができない。いよいよ転がろうとしたとき、S男がそっとマットを引き上げたが、H子は腕での支持ができず、頭を入れられないで前につんのめってしまう。それでも挑戦しようとし、S男から「ころりんていけ」と手も動かしながらの声援をもらった。しかし前に転がることができない。

e. 指導補助者Kの指導による坂道前転

「こう背中から落ちるだけでいい」とマットの上に背中から落ちてみせる指導補助者K（担任）にH子は声を上げておもしろがって見せた。U男が指導補助者Kを真似て転がって見せ、H子に「できるよ」と声をかける。

H子は手をマットに着くが前に転がれない。指導補助者Kに、「力で回ればいい」と質問し、その後は指導補助者Kの顔を見つめた。

Kに対し、「何で前はできたんですか」「何で前の時は違うんですか」と問いつめる。指導補助者KはH子に答えずに何かを取りにその場を離れてしまう。その後ろ姿に「前はできたけど今日・・・」

と、Kのいなかった第2時にわずかな補助でできた前転をその日Kに見せられなかったことを訴えた。この間S男はマットの端を持ったままじっと二人の様子をうかがっている。

その後は、指導者が「もう一回やろう」と声をかけたのに対して、「もういい」と手を振って拒否した。H子は担任であるKに認めてもらえないことが、自分のそれまでの成功がなかったと同じことにしか思えない様子であった。

補助付きで成功したH子の前転をどう評価するか、前転の成功のおもしろさを味わうことのできたH子や、H子にそのおもしろさを味わわせたS男の補助をどう認めるか、前転を手がかりにどんな体験を引き出そうとするのか指導者、指導補助者間の見解の統一が必要である。

指導補助者Kはこの後、鉄製のポール立てを持って来てそれを倒しながら、「これのようにH子の背中がまっすぐのまま丸くならないから回れない」と説明する。H子、U男、A子は笑って見ているが、その説明までで授業時間が終わってしまった。どうすれば背中を丸くできるのか、H子に必要なのはその手がかりではなかったか。

(6) 坂道前転を手がかりにした学習での運動探求

表2は各生徒が試技した回転の種類と、その学習活動を、工夫や新しい技への挑戦など自発的な練習の回数、マットの置き方や使い方に関わる行動の回数、友だちに伝えた技や友だちへの補助や励ましの回数、真似たりして友だちから得た技や友だちの補助や援助を受けた回数、指導者や指導補助者が学習の手がかりとして提案した技への挑戦の回数に分けて取り上げたものである。

表2 「坂道での前転」を手がかりにしたマット運動学習での生徒の活動(約33分間)

	回転の種類				工夫や新しい技への挑戦等自発的練習	マットの使い方、置き方に関わる行動	友だちへ伝えた技、友だちへの補助、励まし	友だちから得た技、受けた補助、援助	指導者、補助者より提案された技
	前転	横転	後転	補助					
S男	3	3		4	17	2	10	3	4
T男	9	2	1	2	14	1	3	5	4
A子	10	1		1	15	1	2	1	7
U男	5	1		2	7		3	1	6
H子	5			1	3		4	6	10

指導者や指導補助者から提案された技への挑戦の回数よりも、自発的な練習や、友だちとの関わりによって練習している回数が、どの生徒も多い。H子の学習にも、指導者の与えた手がかりに挑戦する場には友だちがいて、補助したり声援を送ったり、また、H子の課題達成のために補助を工夫するS男の学習もあった。

S男は、坂道前転の学習が始まって12分間もH子や友だちの学習の傍らに座り込んでみているだけであったが、いったんマットに転がってからは、誰よりも多くの工夫や自発的な運動探求を行っ

ている。S男は、自分の工夫した技のアイデアを友だちに提供して挑戦させたり、工夫した補助で友だちの技を発展させたり、友だちと関わって自分自身のアイデアや運動、補助の確実性を高めている。S男は指導者から提案された技にすぐに挑戦する場面は少ないが、友だちと関わりながら運動探求を行っていることがわかる。表2からは、S男が誰よりも独創的であり、また友だちの課題を通して自己の課題を見つけ解決する力を発揮していると言える。

T男は、チャレンジした回転の種類も多く、友だちの運動を真似し、自分なりのダイナミックな運動として展開している。指導者から提案された技よりも友だちからの技に挑戦した回数が1回ではあるが多い。また、指導者より提案された技でも、指導者がクラス全体や他の生徒に手がかりとして提案した技に自分も挑戦することが多く、T男だけのために指導者が手がかりを与えているものは学習の中で1回にすぎない。T男は、「見てよおかしい」と指導者に聞いかけたり、A子に指導補助者が提案した運動に対して、「手なしでか、手ありでか」と意欲を見せたりしている。友だちの運動や指導者の提案にアンテナを張り、自らダイナミックに動くT男に対して、今回の学習では、その運動欲求を見抜き、運動探求の適切な手がかりを指導者が提供できていたか疑問である。

A子は5人の中で前転の完成度が最も高い生徒であるため、指導者や指導補助者から運動探求の手がかりを得ることが多い。A子もそれに挑戦し、できないときは納得がいくまで工夫し練習する。A子がこの時間に取り組んだ前転系の運動は、連続で行ったものも1種類と数えて、10種類だった。前時にA子が新たに獲得した前転は、腕を体前に上げて起きながらのスピードのある連続だった。本時では数回練習しながら、開脚系の前転、腕側拳での前転、腕側拳前転を片足で起きての連続まで発展させてできるようになった。挑戦する技の内容が難しいため、指導者対A子の関わりの方が、友だちを真似たり、友だちに真似されたりより多い学習になっているが、U男やT男のように、A子を目標にしながら練習している生徒もいる。

U男は、H子を補助したり、A子の運動探求と関わって活発に動いていた印象にも関わらず、数字を並べてみるとマットでの練習回数は少ない。意識としては自分は前転ができていると思っており、H子につききりで補助したり、A子と共に指導者が提案した課題に挑戦してうまく行かず、しばらくマットを離れたりしたためと思われる。しかし、できなかった技への探求はマット上にいないときも続けており、腕側拳の前転では、初めの挑戦から13分後には段階的な練習を工夫して再び挑戦し、成功させている。

H子は、クラスでただ一人、達成目標としての前転学習をした生徒といえる。本時の手がかりである坂道前転ももともと前転のできないH子のための手がかりであった。H子は指導者や指導補助者の提案や補助をクラスの中で最も多く受け、友だちからの励ましや補助も多く受けている。いっばうで自発的な練習がほとんどできていない。しかしS男の補助のアイデアを知り、自分でも納得できたときは積極的に挑戦し、前転にも成功した。本時にH子が成功した前転は、指導者や指導補助者が提案した補助によるものではなく、S男の補助によるこの1回だけだった。自発的な練習もその後で出てきている。

4. 第3時に見られた自発的運動学習の方法

各生徒の運動探求には、指導者や友だちの運動の模倣、友だちが指導者に指摘されたり提案された運動への挑戦、友だちのアイデアをヒントにするなどにより自らの課題を見つけ、その課題を解決し、運動の技能として定着させている、生徒自身が主体となって進めたと言える自発的な学習

の過程が見られた。自らの課題を得てからの探求の様子は以下のように取り上げられた。

a. 言語化された自己課題

<目標の直接的な言語化>

T男のS男の補助による連続横転における発言・「3回連続」

T男の登坂前転における発言・「こっちから行くぞ。危ないぞ」

T男の腕側拳前転での回転後半の練習での課題・「止まるだけーよ」

A子の腕側拳片足前転における発言・「S先生に教えてもらったのやりたい」

<友だちへの課題の提示>

U男の腕側拳前転試行前におけるS男への発言・「何、今の。ねえS君できるあれ」

b. 段階的な課題解決

<運動を分解しての部分練習>

A子の腕側拳片足前転における、回転前半での片足支持の練習

<運動を分解しての段階的練習>

U男の腕側拳前転における腕の支持を徐々に無くしての練習

<運動を分解しての試し練習>

T男のダイナミックな開脚前転における、「こうやったらこう、頭からこう」と言いながらの前転

<仮説をたててのプレ試行を通しての課題解決>

S男の自らの蹴りを強くした前転練習と、マットの持ち手を使っての引き上げの練習を通してのH子への補助

<友だちに試行させてから取り組む>

U男の腕側拳前転におけるA子への試技の依頼・「Aちゃんやってよ」

<問題を見つけての再試行と指導者への問いかけ>

T男の腕側拳前転での回転後半の練習での問いかけ・「見てよおかしい」

c. 探求した運動の確立, 新しい運動への発展

<以前に成功したことを再び試したり, 他の運動にも応用したりする>

U男のH子の前転への補助の再試行とT男への指導

U男の坂道での前転, 及び腕側拳前転成功後の再試行

S男のH子への補助のT男や指導補助者への試行

H子の前時で成功した前転への挑戦 (不成功)

S男の連続横転での往復

T男のS男の補助による横転連続やダイナミックな開脚前転連続

<以前に成功したことを友だちに教える>

U男のH子への補助のT男との再試行

<偶然できた運動を再試行する>

A子流の開脚前転

<自己評価と, 友だちや指導者への報告>

A子の開脚前転及び腕側拳片足前転における報告と再試行

T男の片足踏み切りによる前転・「頭くるっと回ったぞ」

U男の開脚前転及び腕側拳前転での自己評価・「できた」

H子のS男の補助による前転成功でのまわりの者への確認・「見た」

S男のH子や友だちへの補助の繰り返しや、満足そうなしぐさ

<友だちや指導者による評価>

S男のH子への補助に対する指導者の評価、H子、T男、指導補助者の評価と試行

U男の腕側拳前転に対するA子の評価

A子の腕側拳前転連続に対する指導補助者の評価

H子のS男による補助での前転に対する、友だち指導者の評価

運動学習の段階を、わかるような気がする—できるような気がする—できるの段階に分けている金子の論^⑧に照射すると、これら生徒の運動探求の様子は、金子が、できる段階で述べるような、「身体をもつ」世界から「身体である」世界へ至るものであったと評価できる。金子はこのような運動学習の力こそ生涯学習へも続くものであるとしている。

今回の学習において生徒は、指導者から手がかりとして提案された運動だけでなく、友だちの運動を真似し、助けることでも、身近な目標としての自己課題を見つけ、その関わりの中で自己課題を広げていた。

S男がH子に提案したマットを引き上げる補助は、金子の言う、「動きのリズム」を持って「運動共感」をH子の中に引き起こし、わかるような気がするからできるような気がするさらに自分を動かすことができるできる段階にまでH子を導く手がかりになったし一方、S男にとっても力として持っている「動きのリズム」を試行を重ねながら発揮できた。まさに自分を動かすことのできるS男の力をH子の力を借りて確かな技能として身につける機会を得たと言える。

また、A子やU男は、一つの課題を4から5回の試行によって、「できた」と自己評価できるまで探求していた。S男やT男も4から5回同じ技に取り組んでいた。これは、そのくらいの回数でできそうな運動が探求課題として選ばれたと言い換えることができる。生徒の今の力でわかるような気がし、できるような気がして取り組んでみたくなることがその運動課題の難易度の条件と言えそうである。

今回の学習で興味あるもう一点は、一旦探求をやめたと見られる運動が、かなり時間をおいた後に再び試されたり、指導者から提案されてからずっと後になって取り組む姿が見られたことである。それらは12分後から20分後にまで及んでいた。自ら探求欲求を持った運動は実際試技していなくても探求が続いて、できるような気がしたときに試されていると思われ、また、できて自分の技として自身の持った運動も、さらに完成度の高いものとして再試行されていた。

おわりに

今回の学習の分析を通して、技能の習得を目標とされがちなマット運動においても、課題を手がかりとし達成目標にしない学習では、ダンス学習で見られたと同様の自発的な運動探求の機会を与えられるとの示唆を得た。このような探求の力は、知的障害児においても身につけられるべき力であり、学習の場で、その力を発揮しながら確かな力として積み重ねられるものではないかと考える。

そして、能力混合のクラスで生徒が自己の課題を見つけていく可能性、指導者が提供する学習の手がかりの難易度とそのタイミングへの指針も得た。学習者が探求を続けているか、できないとってしまったのか見極めることはとても難しいが、指導者が次々に手がかりとしての課題を変えていくことが学習者の探求を中断させてしまうことがあり、次の手がかりを提案するときも前の課題を

試技できる場の確保が考えられなければならないことは、前回のダンス学習とも共通の問題として上げられる。指導者の提案した手がかりや、援助が、学習者の探求を止めてしまう場面もあった。学習者の探求の目がどちらを向いているか、何を必要としているかということと一致していないことが、学習の後でビデオでようやくわかることがあった。

指導者が提案する手がかりがどのくらい生徒との「共通感覚運動性」⁹⁾を持ちうるか、また、生徒が自らの身体で探求しようとするものの広がりや指導者がどれくらい察知できるかは、一人一人の生徒にとっての新しい運動発見の環境をどれくらい準備できるかとともに大きな課題である。

註

- (1) 田中俊雄 発達のすじみちと障害児の指導 福村出版 1985 pp. 51-53

課題を短絡的にとらえ、教育効果を性急に求める傾向の中で、文化的諸価値を外的作用による「内在化」だけで押しつけて「できる」「できない」という教育効果が重要な指導の指標になってしまうことに対して、「できなさの中にある確かさの可能性」、発達の固有な道筋をその子どものかけがえのない自己実現としてつかむこと、さらに一歩自己実現をすすめさせる指導の重要性とそのための発達診断について述べている。

- (2) 茂木俊彦 障害児の発達と保育 青木教育業書 1982 pp. 24-27

障害児の発達論敵とらえ直しが発達をその高次化、すなわち「タテ」への方向においてとらえ、そこに障害児を位置づけたのに対して、「ヨコ」の方向においても進められるとの考えを、園原太郎の論を引いて紹介している。「ヨコ」の発達の考え方について茂木は、「子ども一人ひとりが現在持っている能力を、同じようなレベルの様々な課題の解決において応用的に展開して発揮していくこと、また異年齢、同年齢の子ども集団において、たとえば教え合いというかたちで、友人関係をふくらませつつ発揮していくことによって諸能力を人格形成と結合していっそう確かな力としていくこと等々の事実に着目し、これに発達の価値を認めていこうとするものである、と理解してよいであろう」としている。

- (3) 佐分利育代 知的障害児のダンス学習 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)第35巻第2号 1993 pp. 349-362

- (4) 近藤伸爾 障害児のマット運動指導 障害児の体育Ⅱ-3-(3) 大修館書店 1981 pp. 298-311

- (5) 岩田紀子 「マット運動に親しむ」ことを目標とした学習指導についての研究—障害児の前転学習指導を通して— 鳥取大学教育学部卒業論文 1993

- (6) 同(3)

- (7) 同(3)

- (8) 金子明友 「わかる」と「できる」の間 学校体育 第47巻第12号 1994/11 pp. 10-13

- (9) 同(8)

